

これから求められる学力を測定する学力調査の研究開発と 学校における学力調査活用に関する研究

— 学校に寄り添った調査を目指して —

教科研究センター 小中学校教科研究課

真弓恵子 吉田仁一郎 笹山さやか 斉藤昌代

天方基史 谷川美紀 栗原忍 吉田恵梨

I はじめに

今年度、新しい時代の流れとともに、68年という歴史をもつSASAが、また新たな改革の時を迎えた。

それは「令和」に変わった6月の所内研究会から始まった。今年度の新メンバーから、「子供たちが調査後すぐに自分の解答を振り返ることができていない」「問題量が多く、子供たちは最後の問題までたどりつけていないのではないか」「分析結果の県の課題と学校の課題が同じとは限らない」「採点・入力負担が大きい」などの意見が口々に出された。それは現場の声そのものであった。

この日から、SASAをもっと学校に寄り添った調査にしていこうという私たちの挑戦が始まった。これはその記録である。

〈キーワード〉 県学力調査の活用、SASA、訪問研修、調査のポイント、自己評価表、授業改善

II 改革への4つの挑戦

これまでの課題や現場の声を基に今年度は、

- ・調査問題の新たな手法の導入
選択肢の導入による子供たちの「つまずき」の明確化 など
- ・調査結果の新たな活用法の提案
自己評価表の導入による子供たちの振り返りの実践 など
- ・より詳しい質問紙の分析の実施
「読書」についての聞き取り調査の実施 など
- ・学校現場の省力化への支援
採点の外部委託やルビ振りの実施 など

の4つの改革に挑戦した。

挑戦1 調査問題の改革

1 調査問題等に関わること

(1) 調査問題の構成の変更

今年度はAの基礎力問題とBの活用力問題、Cの実社会の中で直接生かせるような総合的な問題を一体的に出題した。これまでは、ABで時間を切り、Cだけで時間をとって実施していたが、ABの問題数が多くすべての問題に取り組めない等のことから、今年度は時間の区切りをなくし、問題数も各教科20問以内に減らし、子供たちがすべての調査問題に取り組めるようにした。また、児童生徒のつまずきがより明確化するような工夫を行い、ふるさと教育の観点から、地域的・社会的な課題を含む問題を出題するなど内容の精選を図った。

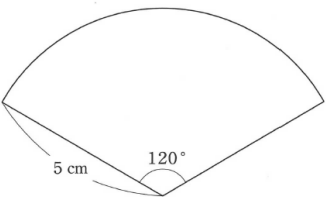
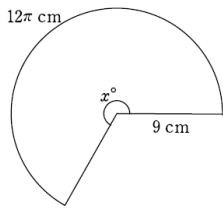
(2) 問題作成の改善や工夫

① 記述式から選択式へ —中学校数学— SASA2019 6 図形（円とおうぎ形の計量）

図形（円とおうぎ形の計量）の問題は、過去の全国学力・学習状況調査やSASAで出題されてきたが、正答率は、いずれも4割を切っている。（資料1）

解答類型をみると、予想された誤答以外の誤答である「誤記」に当てはまる解答が多く見られた。これらの誤記は多岐にわたり、生徒のつまずきがどこにあるのかが見えない状態となっていた。これが授業改善につながらない要因の一つではないかと考えた。

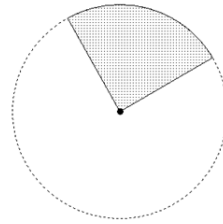
資料1 過去の図形（円とおうぎ形の計量）問題の正答率と誤記の割合

全国学調 H29 4 (3) 全国正答率 32.2% (誤記 38.0%) 県正答率 39.5% (誤記 36.8%)																																					
(3) 半径が5 cm、中心角が120°のおうぎ形の弧の長さを求めなさい。 ただし、円周率は π とします。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="2">解 答 類 型</th> <th>反応率 (%)</th> <th>正答</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>$\frac{10}{3}\pi$ と解答しているもの。</td> <td>32.2</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>$\frac{25}{3}\pi$ と解答しているもの。</td> <td>6.7</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>$\frac{20}{3}\pi$ と解答しているもの。</td> <td>0.3</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>5π と解答しているもの。</td> <td>1.1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>$\frac{5}{3}\pi$ と解答しているもの。</td> <td>2.3</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>$\frac{10}{3}\pi + 10$ と解答しているもの。</td> <td>0.3</td> <td></td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>上記以外の解答</td> <td>38.0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>0</td> <td>無解答</td> <td>19.1</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	解 答 類 型		反応率 (%)	正答	1	$\frac{10}{3}\pi$ と解答しているもの。	32.2	◎	2	$\frac{25}{3}\pi$ と解答しているもの。	6.7		3	$\frac{20}{3}\pi$ と解答しているもの。	0.3		4	5π と解答しているもの。	1.1		5	$\frac{5}{3}\pi$ と解答しているもの。	2.3		6	$\frac{10}{3}\pi + 10$ と解答しているもの。	0.3		9	上記以外の解答	38.0		0	無解答	19.1	
解 答 類 型		反応率 (%)	正答																																		
1	$\frac{10}{3}\pi$ と解答しているもの。	32.2	◎																																		
2	$\frac{25}{3}\pi$ と解答しているもの。	6.7																																			
3	$\frac{20}{3}\pi$ と解答しているもの。	0.3																																			
4	5π と解答しているもの。	1.1																																			
5	$\frac{5}{3}\pi$ と解答しているもの。	2.3																																			
6	$\frac{10}{3}\pi + 10$ と解答しているもの。	0.3																																			
9	上記以外の解答	38.0																																			
0	無解答	19.1																																			
																																					
SASA2017 A 5 県正答率 36.1% (誤記 40.7%)																																					
5 下の図は、半径9 cm、中心角 x° のおうぎ形で、弧の長さは 12π cmです。 このとき、次の比例式の に当てはまるものを答えなさい。 ただし、円周率は π とします。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="2">解答類型</th> <th>反応率 (%)</th> <th>正答</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>「1」</td> <td>18π</td> <td>36.1</td> <td>◎</td> </tr> <tr> <td>「11」</td> <td>9π</td> <td>7.0</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「12」</td> <td>81π</td> <td>4.4</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「13」</td> <td>8</td> <td>6.4</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「99」</td> <td>(誤記)</td> <td>40.7</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「0」</td> <td>(無解答)</td> <td>5.4</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	解答類型		反応率 (%)	正答	「1」	18π	36.1	◎	「11」	9π	7.0		「12」	81π	4.4		「13」	8	6.4		「99」	(誤記)	40.7		「0」	(無解答)	5.4									
解答類型		反応率 (%)	正答																																		
「1」	18π	36.1	◎																																		
「11」	9π	7.0																																			
「12」	81π	4.4																																			
「13」	8	6.4																																			
「99」	(誤記)	40.7																																			
「0」	(無解答)	5.4																																			
	$12\pi : \square = x : 360$																																				

そこで、図形（円とおうぎ形の計量）問題の出題の形式を記述式から選択式にし、おうぎ形の面積を求める式の意味理解を問う問題に変更することにした。（資料2）

資料2 SASA2019 6 図形（円とおうぎ形の計量）

㉔ 次の図のような、同じ半径の円とおうぎ形について、おうぎ形的面積を求める式として正しいものを、下のアからオまでの中から1つ選び、記号で答えなさい。



ア	円の面積 × $\frac{\text{おうぎ形の弧の長さ}}{\text{円周の長さ}}$	35.2% (正答)
イ	円の面積 × $\frac{\text{おうぎ形の中心角}}{\text{おうぎ形の弧の長さ}}$	18.3%
ウ	円の面積 × $\frac{\text{おうぎ形の弧の長さ}}{\text{円の面積}}$	5.3%
エ	円の面積 × $\frac{\text{おうぎ形の弧の長さ}}{360^\circ}$	27.8%
オ	円の面積 × $\frac{\text{円周の長さ}}{\text{おうぎ形の弧の長さ}}$	13.0%

今回、出題の仕方を変更してみた結果、下記のように分析でき、半径が等しいおうぎ形と円の割合についての理解が不十分であることが分かった。これにより、生徒のつまずきに焦点を当てた授業改善案を提案できた。また、選択肢を考える上で、過去の問題を見直したり、現場の教師の声を聞くことで生徒の解答状況を分析したりすることで、より深く生徒の理解の状況を確認することができた。

結果分析

・選択肢**イ**、**ウ**、**エ**の数値を合わせると51.4%となる。

→全体の生徒の約半数が、半径が等しいおうぎ形と円の割合を、異なる数量で表すことができると考えていることが分かる。とくにその中でも選択肢**イ**、**エ**の数値が高く、 360° や中心角という角度に関わる数字や言葉の入った式を選択していることが分かる。

授業改善案

・例えば、円を紙で作って、折ったり切ったりするなどの観察、操作や実験を通して円とおうぎ形を関連付け、おうぎ形の弧の長さや面積とその中心角の大きさの関係を捉える活動を取り入れるなど、円に対する割合について、面積や弧の長さ、中心角にそれぞれ着目しながら考えさせる。

② 問題文の自作 —小学校国語— SASA2019 3

過去の全国学力・学習状況調査やSASAの結果から、

▲文章や資料等から必要な情報を読み取り、条件を満たして自分の考えを書くこと

▲説明的文章の内容を的確におさえ、文章の要旨を捉えること に課題があることが分かった。

そこで、この2点を踏まえて、大問3の説明的文章を「中学生が書いた【文章】」という設定で自作し、児童が文章を読み進める中で、どこでつまづいているのかを分析できるようにした。(資料3)

資料3 SASA2019 3 【文章】より

文章

接続語

段落構成

数字・具体例

文末表現

「食品ロス」を考える

① みなさんは、「食品ロス」という言葉を聞いたことがありますか。「食品ロス」とは、まだ食べられるのに捨てられている食品のことです。農林水産省のホームページで調べてみると、日本の一年間の「食品ロス」の量は約六百四十三万トンです。国民一人当たりの量で考えると、一日におにぎり二つ分の重さの食べ物が捨てられていることになるのです。おどろくべき数字です。さらに、そのうちの約半数は家庭から出されています。「食品ロス」を減らすために、わたしはどのようにしてしようか。わたしは、家庭の「食品ロス」がなぜ多くなるのかを考えてみました。

② 原因の一つ目は、わたしたちが食品を買いきれていることだと思います。買い物に行ってもいっしょにねだんが安くなっていると、必要な量より多く買ってしまったりはありますか。また、一つ買うよりも二つ、三つとまとめて買ったほうが一つ当たりのねだんが安くなるのでした。まとめて買うことは多いでしょう。買物の仕方は各家庭でそれぞれですが、もし食材を使い切ることができなかつたら、どうしていいですか。結局捨ててしまっているのではないのでしょうか。

③ 二つ目は、消費期限・賞味期限の言葉の意味が、十分に理解されていないことだと思います。期限が過ぎてしまい、手をつけられないまま捨てられる食品が多いのが日本の現在の状態です。期限を過ぎたら食べてはいけない、食べたらおなかがいけなくなりそうだというイメージをもっている人はいませんか。確かに、消費期限・賞味期限の二つの言葉は、どちらも食品を食べられる期限を表しています。A 次のようなちがいがあがるのです。

④ 消費期限は、ふくろや容器から出さず、そこに書かれた方法を守って保存していた場合に、その年月日まで安全に食べられる期限のことです。サンドイッチやおにぎり、お弁当、ケーキなど、いたみやすい食品に表示されています。食品によりますが、この期限を過ぎたら食べないようにしなければなりません。

⑤ 一方、賞味期限は、食品のパッケージに書かれた方法を守って保存していた場合に、その年月日まで品質が変わらずにおいしく食べられる期限のことです。スナック菓子、カップめん、かんづめ、ペットボトル飲料など、いたみにくい食品に表示されています。つまり、賞味期限は、もし過ぎていても、正しく保存されたもので、見た目や味などに異常がなければまだ食べることができる場合があります。もちろん、食べても安全かどうかを見きわめる必要があります。

⑥ このように、家庭での「食品ロス」が多くなる原因として、わたしは二つのことを挙げましたが、原因は他にもたくさんあることが考えられます。今年の五月には、「食品ロス」を減らすための法律もつくられました。今、わたしたちには、「食品ロス」を減らすために何ができるのかを考えることが求められています。それだけでなく、考えたことを実行し、よりよい社会になるよう努力することが、これからの時代を生きるわたしたちに必要な態度といえるでしょう。

(使った資料) 農林水産省「食品ロス量(平成二十八年度推計値)の公表について」

大問3の各問の出題の意図は、以下の通りである。

- 問(一) 前の文の内容をとらえ、空欄Aに文脈に沿った接続語を選択する。
- 問(二) 前の段落と反対の内容になるように、空欄Bに当てはまる言葉を選択する。
- 問(三) 6つの段落の中から、対比関係にある段落を選択する。
- 問(四) 文章の書き方の工夫で、【文章】中に用いられていないものを選択する。
- 問(五) 要約した文の空欄に入る、家庭の「食品ロス」が多い原因を書きぬく。
- 問(六) 要約した文の空欄に入る内容を、【文章】中の言葉を使って記述する。
- 問(七) 「食品ロス」を減らすために自分や家族が取り組めることを記述する。

特に問（四）では、文章を読んだり書いたりするときに児童に意識させたいことを選択肢の言葉に入れた。

<p>4 3 2 1</p> <p>自分の考えに反対する考えを取り上げている。</p> <p>読者によびかけるような文末の書き方を使っている。</p> <p>具体的な数字や例を挙げて説明している。</p> <p>文と文をつなぐ言葉を適切に用いて、文章を書いている。</p>	<p>問 四）筆者の文章の書き方のくふうについて、当てはまらないものを、次の1から4までの中から一つ選び、番号を書きましよう。</p>	<p>【文章】を読むときに意識させたいこと</p> <ol style="list-style-type: none">1 「さらに」「また」「つまり」「このように」等、内容理解の手がかりとなる接続語に着目する。 〈問（一）と関連〉2 「約六百四十三万トン」、「国民一人当たり」、「一日におにぎり二つ分」等の具体的な数字や、「消費期限・賞味期限が表示されている食品」等の例に着目する。 〈問（二）（三）（五）と関連〉3 「ありますか」「でしょうか」「どうしていますか」等の呼びかける表現を含めて、文末の言葉の使い分けに気を付ける。 〈問（六）と関連〉4 筆者の考えだけでなく、<u>反対する考えや他の考えが記述されているか</u>を確認する。 〈問（四）と関連〉
--	---	---

文章を自作したことで、接続語、段落構成、文章の書き方の工夫等、児童に着目してほしいポイントに合わせて文章の内容を工夫することができた。そのことにより、児童の課題をつかむこともできた。SASA は児童生徒の実態を把握し、教師の授業改善につなげることを目的とした調査であり、学校現場で多く活用されることが望ましい。問題文の自作により「禁複製」でなくなり、活用の幅も広がるだろう。

(3) 「調査のポイント」の作成の意図

調査後すぐに授業改善の意識を図るために「調査のポイント」を作成し、調査問題とともに各学校へ配付した。授業改善の参考資料として、設問ごとの出題の意図や指導上の留意点を明らかにし、教科別にまとめたものである。「調査問題の概要」で各問題における到達目標を示し、その到達目標の達成に向けて、指導上大切にしてほしいことや、気を付けてほしいこと、どのような授業づくりをするとういかなどを示している。一例として、小学校理科の「調査のポイント」を挙げる。(資料4)

調査後すぐに各学校の課題に合わせて、「調査のポイント」を活用し、実態に合わせた授業改善ができるように工夫した。

資料4 小学校理科 「調査のポイント」より

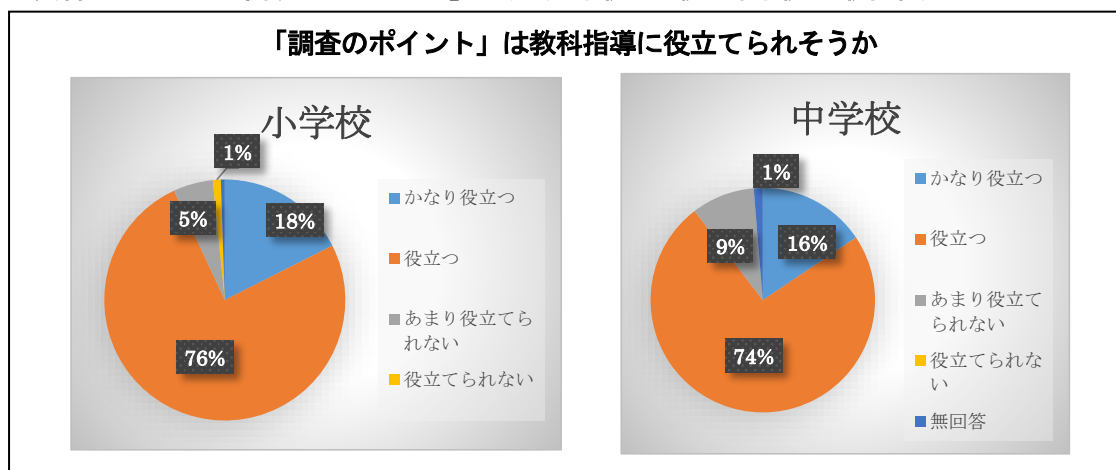
小5理		SASA 2019 第68次福井県学力調査	
		小学校理科 調査のポイント	
通し番号	問題番号	A 出題の意図・指導上の留意点	
①		(1) 過去のSASAを見ると、乾電池のつなぎ方と回路を流れる電流の向きや強さを関係付けて考察することに課題が見られる。本設問にあるように、以下のことを意識して授業づくりをしてほしい。 ・目的をもたせた上での、ものづくりを通して、電流の働きを考えさせる。	
②	1	(2) ・乾電池1個で回路をつくったときと、乾電池2個で回路をつくったときとで、電流の働きを比較して考えさせる。	
③		(3) ・予想通りの動きや働きにならない場合に、目的の確認、不具合の原因、どのように修正するかなどについて他者と話し合う活動などをして、うまくいかなかった原因を考えさせる。 ・直列つなぎと並列つなぎの特徴を理解させ、ものづくりにその知識を適用し考えさせる。	
④	2	(1) 物の重さを比較するときには、第3学年の内容においても条件制御の考え方を働かせ、体積を同じにして重さを測定する。本設問のように、粉状の物の重さを比較するときには、同じ容器に入れ、容器からはみ出した部分はわりばしなどですり切って、体積を同じにする方法がよいということを、実験を通して押さえてほしい。	
⑤		(2) 物の重さと体積の関係を考察する際には、本設問のように、第3学年算数「表と棒グラフ」で学んだことを活かして、実験結果を表と棒グラフで表し、重さの違いを捉えやすくする工夫も考えられる。	

資料4のAでは、出題の意図として、本設問が過去のSASAで福井県の課題であったことを述べている。

Bではそれを踏まえ、授業づくりにおいて意識してほしい点を4つ示している。またCでは、他学年・他教科の内容と関連させながら指導するとよい、という今後の授業において工夫すべき点が示されている。

調査後、各小・中学校の担当教師対象に「SASAに関するアンケート」を行い、小学校188校、中学校77校からの回答を得た。その中の「『調査のポイント』は、教科指導に役立てられそうか」という項目の結果は、以下の通りである。(資料5)

資料5 「SASAに関するアンケート」より (小学校188校 中学校77校回答)



「役立てられる」と答えた割合は、小学校約 94%、中学校約 90%であった。役立てられると答えた意見の中には、活用例として以下の意見が見られた。

- ・「調査のポイント」を全職員に配付し、活用を推奨した。
- ・「調査のポイント」を他学年の先生にも見てもらった。
- ・英作文の導入で、「調査のポイント」を参考にしながら授業を行った。

2月に研究所のホームページにアップした「報告書」には、調査で良好であった点と課題であった点の分析や、課題の解決に向けた授業改善事例を示した。さらに、今年度の新たな取組みとして、設問ごとに、県正答率と比べ、とりわけ良好であった学校への聞き取りを行った。

以下に、小学校理科の内容（抜粋）を紹介する。（資料6）

資料6 小学校理科実践例一覧（抜粋）

問題番号 (県正答率)	聞き取り内容
条件制御の考え方を働かせて解く問題が4問とも良好	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたいことを明確にして、変える条件、変えない条件を話し合わせて、ノートに整理させてから実験している。 ・「この実験でこんな結果が出たら、こんなことが言えるはず」という考察までの見通しをもたせてから実験をしている。 ・「植物の発芽、成長、結実」の単元では、教師がファシリテーターをして、発芽の条件を調べる実験での変える条件、変えない条件を丁寧に確認させたが、その後の単元では、主体的に子どもたちに考えさせた。徐々に子どもたちだけでも条件制御の考え方を働かせて、解決の方法を発想できるようになってきた。 ・実験が失敗したときに、必ずどうして失敗したかのかを考えさせている。 ・実験はなるべく全員に経験させている。 ・3クラスあるが、単元ごとに授業の流れや必ず考えさせたいこと、観察実験で気を付けさせたいことなど、教師同士で情報を共有しながら進めている。 ・学習の必然性を感じさせる授業づくりを心がけている。例えば、「流れる水のはたらき」の単元では、災害の話題や児童の自由研究を取り上げた導入を行った。 ・実験をするときには、目的に合った実験器具を選ばせるところから考えさせている。
③ (2) (30.6%)	
③ (4) (68.5%)	
④ (2) (62.7%)	
④ (3) (75.2%)	

挑戦2 調査結果の改革

(1) 自己評価表の導入と活用例

児童生徒が調査後直ぐに、結果が返却されないという現場からの声があった。そこで、調査後すみやかに自己評価表を使って自己採点をする事で、児童生徒が自分のつまずきを把握し、自分を評価する力を養うことができる「自己評価表」を導入した。(資料7)

児童生徒が自己評価しやすいように、解答用紙と自己評価表を同じような形にすることで、自分が書いた答えと同じ場所に解答があり、見やすいものにした。また、記述式問題では、採点の条件ごとに採点欄を作り、順を追って自分のつまずきを把握できるようにした。(A) さらに、簡単な説明を加えることで、子供自身が見直しやすいように配慮した。(B)

資料7 中学校国語自己評価表

<小学校活用例>

A小学校 (社会 25 分の流れ)

- ①机上是赤ペンのみを出した状態で、担任が問題用紙と解答用紙を返却し、自己評価表を配付。
- ②担任から、自己評価とは○の数を競うものではないことを伝え、自己評価の2つの意義を説明。(図1)

- ・調査日から間隔をあけずに採点することで、自分ができていたところ、できていなかったところをすぐに把握することができる。
- ・できていないところが、なぜできていなかったのかを知ることができる。今後、同じような問題が出たときに今度は○になるように、間違いを早く理解するためのもの。



図1

- ③担任が順番に答えを読み上げ、それに合わせて児童は自己評価表に○×を書き入れる。担任は解説をする際、実物投影機を使って問題を拡大しわかりやすく提示。(図2)



図2

- ④児童は、記述の解答で正誤の判断に悩むところは担任に質問し、随時それに答える。地図帳を使って解く問題では、地図帳をもう一度開きながら使い方を確認する。(図3)



図3

<中学校活用例>

B中学校（数学 30 分の流れ）

①教科担任が問題用紙と解答用紙を返却し、自己評価表を配付し、自己採点のやり方を説明。



図 4

②生徒各自で自己採点を行い、分からない箇所がある時は、挙手し、教師がその場で個別指導を行う。（図 4）



図 5

③自己採点を終えて解答用紙を回収した後、自己評価表を見ながら生徒同士による「教え合い」を行う。問題用紙を見ながら、なぜ間違っているのかを確認したり、解き方を教え合ったりしていく中で、自分のつまずきを見つけていく時間にする。（図 5）教え合いをしている中で、分からない問題がある時には、教師も加わり問題に向き合う。

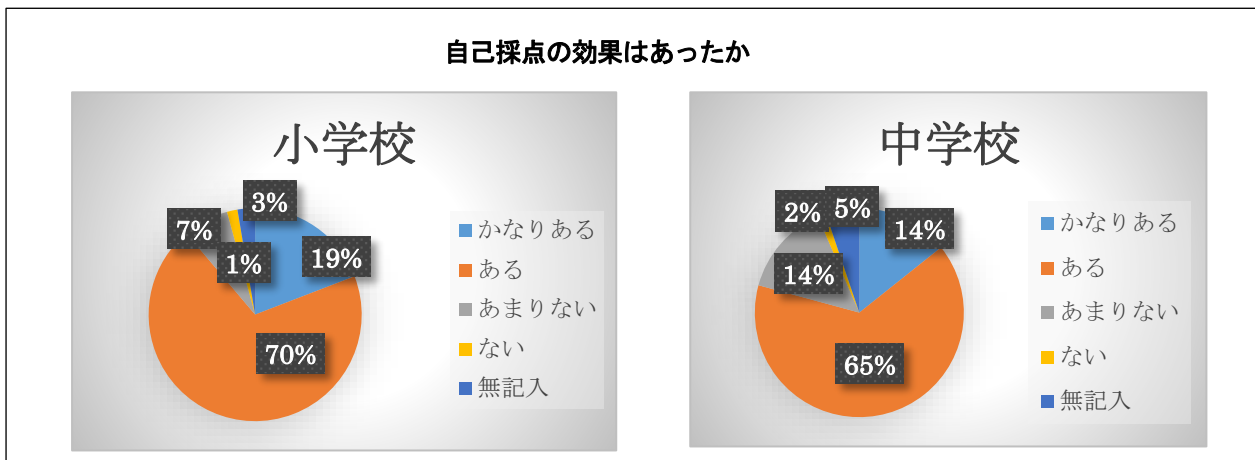


図 6

④教師が特に学級全体の課題となった問題について具体的に説明し、全員で聞く時間を 10 分ほど設ける。（図 6）

自己採点の効果については、小学校は約 9 割、中学校では約 8 割で効果があるとしている。

資料 8 SASA に関するアンケート結果（小学校 188 校 中学校 77 校回答）



<教師の感想>

○記憶が鮮明なうちに自己採点に取り組むことができ、解説もしやすくポイントを絞って指導できた。

○自分がどのくらいできたか確認できたことで、これからの学習への意欲付けになった。

○自己採点後の解説では、「調査のポイント」に書いてあるポイントを基に実物を使ったり、図をかいたりしながら進められて、生徒の理解を確認しながら進めることができた。

▲条件に合っているかどうか児童自身が判断するのは初めてなので迷っていたり、読み込めていなかったりしていた。

▲その場で「○」か「×」か分かるのはよいことだが、「×」ばかりが並ぶ児童への対応が難しい。

実施後に行ったアンケート結果より、SASA 実施直後に自己評価表を導入したことは効果的だったと言える。しかし、今年度からの初の取り組みであったため、教師の採点を行ってから自己評価をさせるのか、採点が終わっていないままに自己評価をさせるか、その手順や解説をどのように行っていくか、学校現場の戸惑いを感じた。今後、自己評価を行う意図や目的、そのやり方をどのように周知していくかが課題となる。

(2) 調査問題の結果や回収した解答用紙から見えること

今年度は、答案用紙が本所に残ることから、各教科担当者がいろいろな視点で児童生徒の答案を分析することができた。以下に、小学校社会・中学校英語の分析内容（抜粋）を紹介する。また、他の問題についても「報告書」に掲載している。

【小学校社会】 8 (2) 平均正答率 39.4%

折れ線グラフの読み取りは、生産量だけや消費量だけなど、どちらか片方の読み取りならできているが、2つを比較して説明していない解答が約18%あった。また、グラフの読み取り自体ができていない解答は約33%あった。

折れ線グラフは第4学年の算数で学習する内容である。また、理科でも第4学年の「天気と気温」で学習する。社会科の時間だけではなく、他教科の授業でも、教科横断を意識して活用し、資料を読み取る機会を増やしてほしい。まずは、1つずつの資料を丁寧に読み取る活動を意識して行い、1つの資料がしっかり読み取り取れるようになったら、複数の資料で読み取ったことを比較させたり関連付けたりして考える時間を取ってほしい。

【中学校英語】 2 (1) 平均正答率 30.5%

会話の状況に応じて、与えられた動詞 write を用いて I wrote と書く問題である。多岐にわたる誤りが動詞の部分に見られ、多かったのが、write の過去形を writed とした解答であった。処理番号「5」の「主語は正しいが、動詞に誤りがある」と、処理番号「9」の誤記に分類された解答を調べた結果、全体の約31%が writed と解答していた。過去形を使う状況だと分かっているが、正しい動詞の活用が身につけていない。また、無答を含め、全体の66.8%が動詞を正しい形に直せず、過去のことを伝えるという状況に合わせて動詞を正しく過去形にする力が不十分であると考えられる。

また、主語を付けない解答が、処理番号「6」の「動詞は正しいが、主語に誤りがある」および誤記に分類された解答に見られ、その割合は全体の約33%であった。正しい文構造を用いて文を書く力が不十分であると考えられる。

上記の分析内容のように、児童生徒の解答用紙から見えてきたことが多くあった。特に、誤記「9」に当てはまる解答にどのようなものがあるかを知り、結果、児童生徒の学習状況を分析できたものも多かった。問題作成にあたって、児童生徒のつまずきを予想はするが、結果は作成者が考えもつかなかった解答であることも少なくない。児童生徒の解答から現状を分析することが非常に大事である。

挑戦3 質問紙についての改革

(1) 質問項目の変更および「質問紙の見方」作成の意図

児童生徒質問紙では、実施後すぐに学校現場で児童生徒の対応に生かすことができるようにと、また、質問の項目数が多く、全国学力・学習状況調査と質問内容が重複している項目もあったことを受けて質問項目数と内容の見直しを行った。

昨年度55問あったものを小学校では49問、中学校では50問に質問項目数を減らした。児童生徒の現状を把握することができるような質問の導入を図り、例えば、生活に関する項目では、学校生活に関する意識を問う質問だけでなく、自教室での生活に関する意識を問う質問を取り入れた。学習に関する項目では、新学習指導要領に示された各教科の目標を踏まえて、質問内容を作り変えた。

今年度実施された全国学力・学習状況調査において読書に関する項目が課題に挙がったことを受け、児童生徒の読書習慣に関する質問項目を新たに取り入れた。

また、質問紙の結果の活用状況を見ると、結果が学校現場に還元されるまでに少し期間が空いてしまい、児童生徒への対応にすぐに生かすことができないという課題があった。特に、「非認知」に関する項目は、昨年度の報告書でも、どのような意図でその質問をしているのかが書かれておらず、現場の教師にもその意図が伝わっていない。

そこで、今年度は実施後すぐに児童生徒への対応に生かすことができるよう、小・中学校ともに「質問紙の見方」を明記した。資料9のように、各質問項目において、どのような視点で、児童生徒の回答に注目するとよいか明記した。

実施後、「質問紙の見方」の活用状況について、9校に聞き取り調査を行った結果、どの学校も実施前に認識はしていたが、実施後「質問紙の見方」を参考にしながら対応に当たった学校はなかった。質問紙の活用について、課題があるとする。

資料9 小学校の「質問紙の見方」より

学校生活・家庭での生活に関する項目

- ①学校生活は楽しいですか。
- ②学級で、いっしょに学習したり、活動したりすることは楽しいですか。
- ③ふだんから、一週間でどれくらいニュースを見ていますか。
- ④平日に、一日平均どれくらいの時間、宿題をしていますか。
- ⑤平日に、インターネットやゲームなどを一日平均どれくらいの時間、利用していますか。

子どもたちの普段の生活状況を把握できます。一人一人の回答を確認して、指導に活かしてほしいと思います。

(2) 読書に関する調査結果

今年度実施された全国学力・学習状況調査では児童生徒質問紙共に、読書に関する質問項目があった。その内容が以下の項目である。

小・中学校ともに、全国平均を下回っている項目があり、児童生徒が読書に対して意欲的に取り組めていない傾向にあることが分かった。この結果を受けて、福井県の小中学生の読書環境を調べるために、SASA2019では読書環境に関することを問う以下の項目を新たに取り入れた。

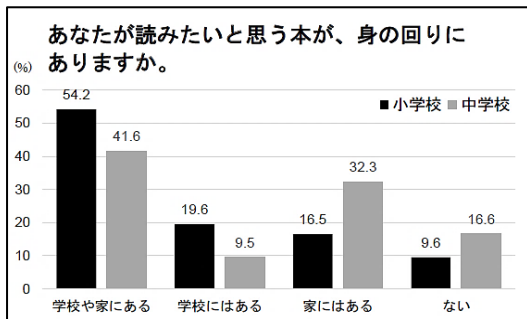
- ・あなたが読みたいと思う本が、身の回りにありますか。
- ・次の本の種類の中で、あなたがもっとも好きな本は、どの種類の本ですか。
- ・あなたは小学5年生（中学2年生）になってから、並行読書（学習している題材や作者に関係のある本を読むこと）をしたことがありますか。
- ・あなたは、最近1か月間に何冊くらい本を読みましたか。（マンガ、雑誌を除く）
- ・上の質問で、「0冊」と答えた人に聞きます。読まなかった理由は何ですか。最も当てはまる番号を選びなさい。

これらの項目に対しての児童生徒の回答を元に、読書環境の調査を行った。

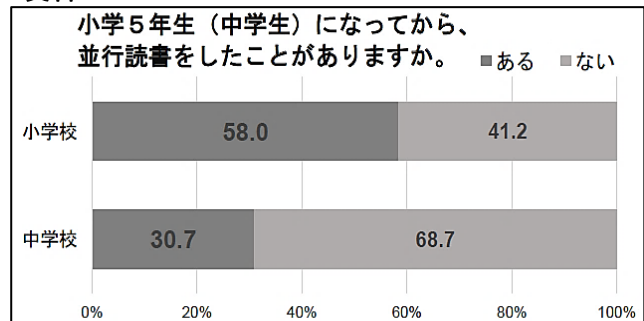
まず、小学校では、読みたいと思う本が「学校や家にある」と答えた児童は、54.2%おり、「学校にはある」と答えた児童は、19.6%いた。小学校では、ある程度児童たちが読みたいと思う本がそろっている環境があると言える。中学校では、読みたいと思う本が「学校や家にある」と答えた生徒が、41.6%おり、「学校にはある」と答えた生徒は、9.5%だった。小学校と比べると、学校には読みたいと思う本があまりそろっていないことが考えられる。また、「家にはある」と答えた生徒が、32.3%いた。子どもたちは学校の本よりも、読みたいと思う本を自分で購入して読んでいく傾向にあると言える。(資料10)

また、並行読書の実施状況を見てみると、小学校では、58.0%の児童がしたことがあると答えているのに対して、中学校では30.7%と大変低い。国語や理科の教科書には、単元の終わりにその教材に関連したおすすめの本が紹介されている。学習指導要領にも読書の大切さが明記されており、教師が意識して読書活動に取り組む必要がある。(資料11)

資料10

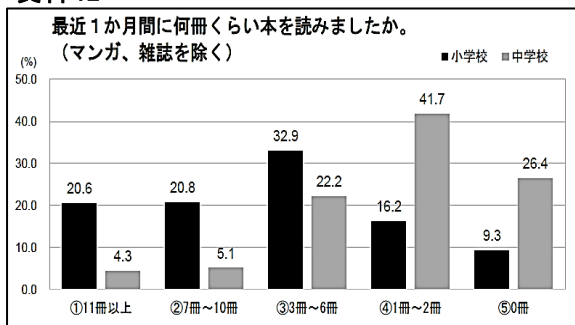


資料11

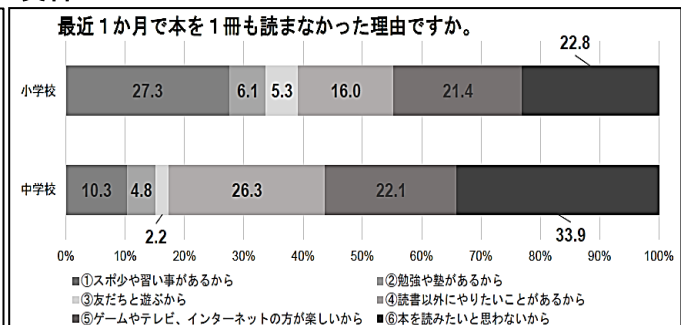


そして、最近1か月間での読書冊数を見ても、小学校では、3冊以上読んでいる児童は全体の約7割以上いるが、中学校では全体の約3割程度しかいないことが分かった。(資料11) 中学生の読む本は小学生が読む本と比べ、文字数やページ数が多く、読むのに時間がかかることが想定できるが、中学生の本を読まない理由を見ると、「読書以外にやりたいことがあるから」や「本を読みたいと思わないから」と答えている生徒が2項目合わせて、約6割近くいた。このことから、本を読むことに興味関心が低い様子がうかがえた。(資料12) 今回の調査で、中学生がいかに読書から離れた生活を送っているかということが分かり、学校における読書活動の詳細な状況を把握する必要がある。

資料12



資料13



その一環として、まず今年度、読書環境に関する項目において数値が高かった学校25校に、学校でどのような取組みをしているのか聞き取り調査を行った。聞き取った事例を紹介する。

<小学校での読書指導の実践例>

- ・2か月に1回のペースで、地域の図書館と連携して、図書館の本を各学年20冊ずつ入れ替える。本の種類は教科書に掲載されている並行読書のリストなどを活用して、担任が選んでいる。
- ・スクールプランで、本を読むのが好きな児童が90%以上という目標を掲げて、教職員全員が共通理解をも

って取り組んでいる。

- ・図書支援員が季節に合った本を選び、低・中・高学年に分かれて読み聞かせをしている。
- ・読書週間では、全教職員が自分の担当しているクラスと別のクラスに行って、読み聞かせをしている。

<中学校での読書に関する取り組み>

- ・各教科の担当からどのような本がほしいか聞き、地域の図書館から授業に関する本を定期的に借りるようにしている。借りた本は、図書室前に並べて紹介したり、テーマを設けて特別コーナーを作ったりしている。
- ・スクールプランにおいて、生徒個人が定めた年間の読書冊数を達成する割合を7割以上に設定し、教職員が共通意識をもって読書指導に当たっている。
- ・1、2年生は1学期末に図書支援員によるブックトークがあり、3年生は2学期末には下の学年にブックトークを実施している。それを意識して読書をしており、意欲に繋がっている。
- ・国語では、太宰治の「走れメロス」の原本となる本と作者の紹介を行い、2つの作品を読み比べて、表現の違いに注目して考える授業を行うなど、並行読書を意識して取り入れている。

各学校に聞き取りを行う中で、どの学校でも児童生徒のために読書をする環境を整えたいという思いから、全校一丸となって読書環境の改善に取り組んでいることが分かった。また、取り組みを進めるにつれ、児童生徒が本を読むようになったと実感していると答えた学校もあった。

挑戦4 新たな学校支援

(1) 識字障害等のある児童生徒への支援

① ルビ振りの対応

今年度新たにルビ振りの要望があり、調査日までに準備が整わず、手書きで対応した。市町単位での依頼もあり、識字障害を抱えている子供や外国籍の子供等、対応の必要な児童生徒の数は予想以上に多いという現状が明らかになった。(表2)

表2 SASA2019 ルビ振り対応状況

校種	学校数(校)	人数(人)
小学校	23	72
中学校	5	13
合計	28	85

② 拡大文字の対応

弱視の児童への対応として、拡大文字の問題作成はできないかとの相談が2件あった。それぞれの児童に見やすいフォントサイズが違っており、どのサイズやフォントにするか学校と連絡を取り合い、最も適している問題と解答用紙、自己評価表を作成した。通常の調査問題は、11ポイントの教科書ICA体の書体であるが、二人の児童に適したフォントサイズは28ポイントと17ポイントで、ゴシック体が最適であったこともあり、データを基に作り直した。(資料14) 問題等をコピー機で拡大するやり方だと、フォントサイズは20ポイント以上に対応しにくいということも今回はじめてわかった。

資料14 拡大対応した問題例

1 福井県立恐竜博物館に来ているあおい
プレゼントすることにしました。

(1) あおいさんは、恐竜のぬいぐるみを見つけたら、人の中に同じクラスのさくらさんを見つけたら、さくらさんは前から13番目にならんでいます。さくらさんまでの中から1つ選び、記号を書きま

きょうりゅう
1 福井県立恐竜
弟のたん生日に恐
ことにしました。

これらの取組みより、次年度当初に、全小・中学校へルビ振り・拡大文字・点字の希望を聞くことにした。今後も、児童生徒の実態に合わせて対応していく。

(2) 教師への採点支援

若手教員や初めて SASA に関わる教師に向けて、正答誤答の分類の仕方や子供のつまずきの見つけ方を伝えることを目的として、校長会等で採点支援の募集をした。要請のあった「越前町朝日地区小・中合同採点研修会」について紹介する。

調査の翌日（12月12日）、小・中学校国語、算数・数学担当の研究所員が採点支援を行った。この研修会では、当初の目的に加え、異校種の課題を互いに知ってもらおうという目的もあった。

最初に研究所員から出題の意図と採点における注意点を説明した後、参加した教師全員で小学校の採点を行い、その後中学校の採点を実施した。採点の中で、小学校の問題は5年生だけではなく、全ての学年で継続して指導していく必要があること、また、中学校の問題からは、小学校からの積み重ねが大切であることを感じたようであった。（図7）教科・校種問わず全員で小・中の採点を行うことで、児童生徒がどこでつまずいているのかが分かったり、採点に迷うところも話し合うことで解決したりする機会になった。（図8）



図7 研究員がアドバイスをしている様子



図8 異校種で話し合う様子

(3) データ処理システムの変更

今年度、現場における教師の採点業務と入力作業の大幅な軽減を図ることを目的として、採点結果の入力とデータ処理業務の外部委託を行った。

<マークシート方式調査の検証>

まず、マークシート方式（以下「マーク式」）の導入の可能性を検証するために、市販の読み取り式のソフトウェアを試してみた。しかし、一教科当たり約7,000人分のデータ×11分野（小学校国語・社会・算数・理科・質問紙、中学校国語・社会・数学・理科・英語・質問紙）という膨大な量のデータの読み込みは、本所の現在の環境では不可能であった。次に、専門業者にマーク式データ処理を委託する方針で様々な検証を進めた。

まず、マークシート本体の費用についての検証をおこなった。SASAは毎年問題の内容や形式が同一ではなく、定形のマーク式解答用紙（マークシート）を使用できないため、解答欄の印刷はカスタマイズ印刷となる。そのため、定形のマークシートを使用した場合と比較すると2倍以上の費用がかかることが分かった。

また、当初A4片面印刷を想定していたが、記述欄のスペースを十分にとるためには、A4両面印刷（裏面に記述解答欄を配置；価格1.3倍）もしくは、B4片面印刷（価格1.9倍）に変更する必要があることも判明したため、「A4片面マーク式解答用紙（教師による記述部分の処理番号のマーク欄あり）」（図9）と「通常印刷（A4片面）の記述用解答用紙」（図10）の2枚の解答用紙を使用してマーク式調査の試行テストを行った。

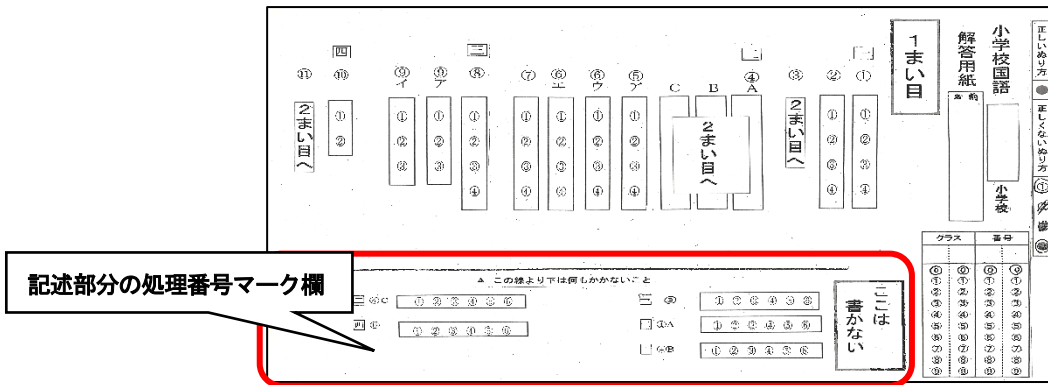


図9 マーク式解答用紙

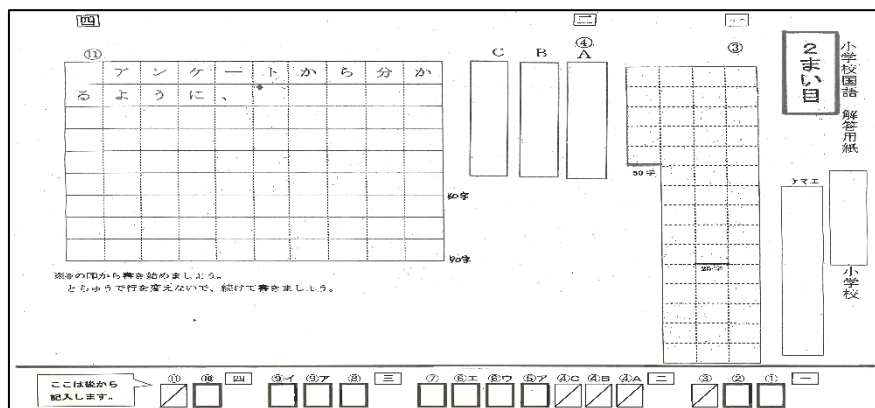


図10 記述用解答用紙

次に、実際にマーク式調査に児童・生徒が問題なく対応できるかを検証するために試行テストを行った。中学生については、外部検定試験を受験する機会もあることから、マーク式調査に十分対応できると考え、試行テストは小学生を対象として実施した。県内の小学校4校で、6月から7月にかけて実施した結果、以下の3つの問題点が明らかとなった。

《問題点1》マーク欄を○で囲んでいたり、はみ出していたりして正しく塗りつぶすことができていない。(図11)

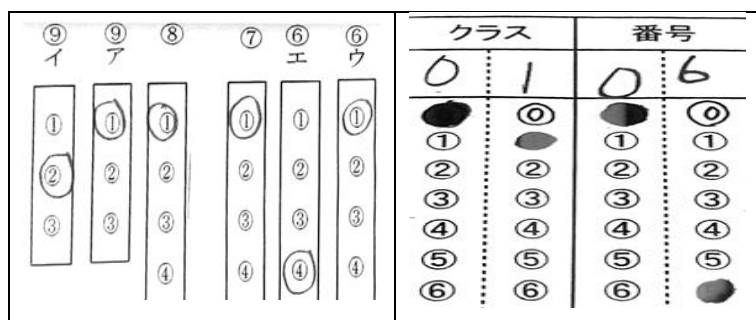


図11 児童の誤記入例

〈対応策〉試行テスト3校目より、「正しいぬり方」「正しくないぬり方」の例を解答用紙に追加して対応した結果、児童のマークミスは減少したが、ゼロにはならなかった。(図12)

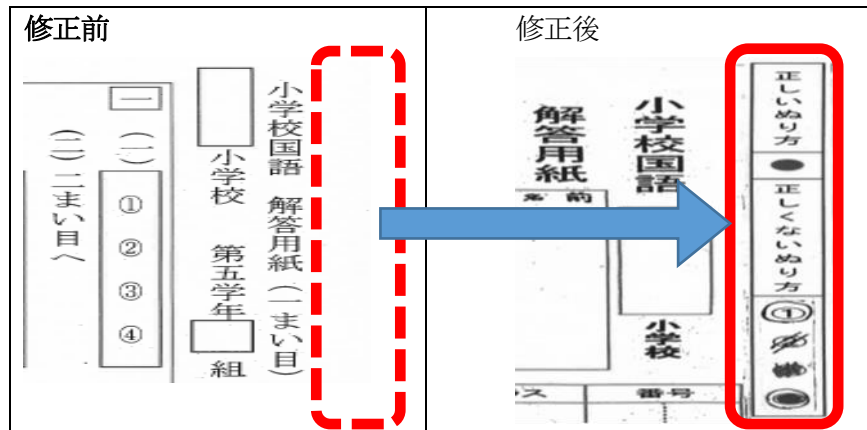


図12 マーク式解答用紙の修正

《問題点2》調査後行う自己採点を行うために、問題用紙に自分がどのような解答をしたのかを残しておくことがほとんどの児童ができていない。

〈対応策〉 試行テスト2校目より、担任の先生から、「問題用紙に○をつけるのを忘れないように」と調査の途中で児童に声掛けをするよう依頼した。しかし、解答しながら、問題の選択肢に○をつけることは、児童にとって負担が大きく、大きな改善は見られなかった。

《問題点3》机上に問題用紙1部、解答用紙2枚がある状態での解答は、普段の問題と解答欄が一体となっている形式に慣れている児童にとって、負担となっている。(図13)

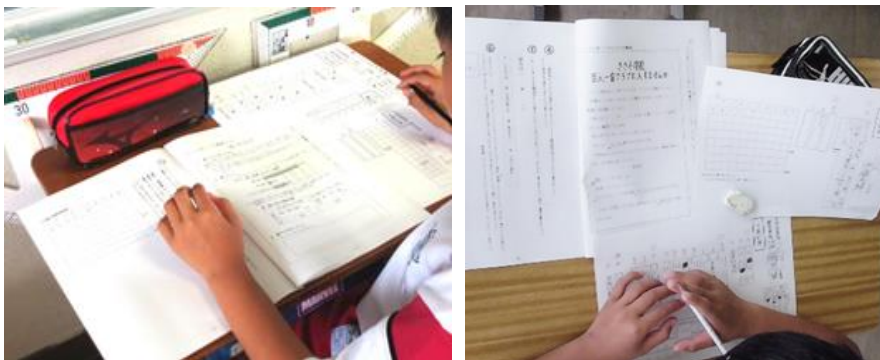


図13 マーク式試行テストの様子

本試行テストから、約7,000人の児童が本番の調査において、「マーク式の解答方法に戸惑うことなく調査に取り組める」という確証は得られなかった。そのため今回はマーク式の導入は見送ることとし、これまでの解答用紙を活かす方向での外部委託を行うこととした。

＜スケジュールの検証＞

最後に実施日から結果返却までスケジュールについて検証した。SASA2019では、1月15日に個人票を含む全ての結果が帳票として各学校に返されたため、SASA2018に比べ各学校では、約2週間早く結果の分析をすることが可能となった。本所では、分析結果や児童生徒の解答用紙を基に、授業改善案等を盛り込んだ報告書を昨年は3月に公開していたが、今年度は2月中に公開することができた。(図14)

これにより、学校現場では、次のようなメリットを享受することができた。

- ・児童生徒は調査実施後に行った自己採点の確認をすぐに行うことができる。
- ・教師は結果に基づいた授業の改善に素早く取り組むことが可能となる。
- ・管理職は分析結果を反映した次年度のスクールプランを早くから取りかかることが可能になる。

		12月	1月	2月	3月
1	教師採点	SASA2018 実施日 12/11,12			
	SASA2019 実施日 12/10,11				
2	児童・生徒 自己採点	SASA2018			
	SASA2019				
3	結果入力	SASA2018 (各学校) 12/28			
	SASA2019 答案回収12/18 (委託業者)				
4	データ処理	SASA2018 (各学校) (研究所) (各学校)			
	SASA2019 (委託業者)				
5	結果送付	SASA2018 1/23			
	SASA2019 1/15 個人票配布				
6	報告書	SASA2018 3/8			
	SASA2019 2月中				

図 14 実施後のスケジュール比較

IV おわりに

今年度は、SASA を学校・教師・子供たちの視点から見つめ直し、様々な改善に取り組んだ。しかし、決して最終形ではない。より充実した調査にするための通過点に過ぎない。調査問題に必死に向かったであろう子供たちの答案用紙を見ながら、出題の仕方や問題の内容など、次の構想がふつふつと湧いてくる。

我々の仕事は、調査が終わってからの本番であり、子供たちの誤答や先生方の採点から見えるものを、今度は形にして、学校に還元していかなければならない。

これから先も、68 年の歴史の中で試行錯誤しながら先輩方が作り上げてきたものを引き継ぎつつ、時代に応じて新しい形を取り入れていく。学校に寄り添った調査を目指して、我々の挑戦はまだ始まったばかりだ。